針供養の変容と裁縫を教える場の終焉

――千葉県佐原の事例から――

島立理子

はじめに

筆者はこれまで、昭和四〇年代はじめまで各地にあった裁縫を教える私塾である裁縫所について、千葉県佐原を中心に、その性格などについて論じてきた。[1] 裁縫所へは嫁入り前に裁縫技術を身につけるために多くの女性が通って来ていたが、裁縫所は単に裁縫を教える場ではなく、一人前の女性となるための総合的な女子教育の機関として存在していたことを明らかにしてきた。この裁縫所において行われた行事に針供養がある。毎年二月八日あるいは一二月八日に、豆腐に折れた針をさして日頃お世話になっている針に感謝する。しかし、裁縫所における針供養のあり方は、時代と共に変化している。

針供養の行事の変化については長沢利明氏が「針供養と奪衣婆－東京都新宿区新宿・正受院－」[2]、「浅草の針供養－東京都台東区浅草淡島堂－」[3]において論じている。

それによれば新宿正受院の針供養は、江戸時代からの奪衣婆信仰が特異な発展をとげて昭和三二年（一九五七）以降に成立した新たな行事であることを指摘している。また、浅草寺淡島堂の針供養が、現在のような盛大な寺社の年中行事としての針供養として成立したのは一九三〇年代と比較的新しい事を指摘し、この行事が定着しえたのは家ごとの祭りとして豆腐やコンニャクを用意して針をさし、それを淡島堂に納めたり、川へ流したりする針供養が行われていた基盤があったからとしている。しかし、家々で行われていた針供養の行事が寺社の年中行事へと変化した背景や理由については論じていない。

本稿では佐原の針供養を事例として、針供養の行事の変化と背景、その意味を探る。

一　針供養とは

毎年テレビや新聞で紹介される針供養は、東京では浅草浅草寺の淡島堂、世田谷の森厳寺、新宿の正受院、千葉県なら木更津の成就寺といった寺院で行われる針供養である。多くの人が訪れ、豆腐やコンニャクに折れた針をさす。盛大に針供養が営まれており、寺院の行事の一つとなっている。

最近では人形供養、筆供養、ハサミ供養など様々な道具の供養が行われているが、針供養はそれらの道具の供養に比べて伝統も古く、由緒正しい器物供養の一つといった印象を受ける。

広辞苑[4]によれば、針供養は「二月八日または一二月八日に、婦人が裁縫を休むこと。折れた針を集めて豆腐に刺し、淡島神社に納める地方もある」とある。

「二月八日または一二月八日」に行うとあるが、東日本では主に二月八日に、西日本では一二月八日に行われることが多い。この二月八日、一二月八日は「コト八日」と呼ばれる日である。どちらか一方を「コト始め」、もう一方を「コト納め」とも呼んでいる。

「コト」とは、通常とは違う何か改まった行事を意味するもので、本来はこのコト八日だけに使われる言葉ではなかった。この「コト八日」の行事は全国的に行われている。

この日は、さまざまな神や妖怪の訪れる日であると考えられ、それらが家に侵入するのを防ぐため、家々の門口に目籠や柊などを掲げるといった習慣が広くみられる。また、強い風が吹くとの伝承もあり、この風を防ぐためにさまざまな呪法も行われている。

コト八日の行事の内容は多様であり、その一つが針供養で、その分布は全国に広がっている。各地の事例を簡単に紹介すると、山梨県甲府市では針を休めるだけではなく、こんにゃくと風呂吹き大根を食べた。[5]福島県会津若松市では豆腐に松葉をさして供え、古針は大根にさして川に流し、その後供えた豆腐は下げて食べる。[6]能登半島では一二月八日を針歳暮（ハリセイボ）と呼び、珠洲郡では女の子のある家では夜餡入りの餅を焼いて、針を祭り裁縫の上達を祈る。[7]

コト八日と針供養がどうして結びついたのかはよくわからないが、この日は一つの節目と考えられ、もの忌みの日として仕事、針仕事を休み、その後に針供養の行事ができあがったと考えられる。

広辞苑には「折れた針を集めて（略）淡島神社に納める地方もある」とある。実際に針供養で有名な浅草の浅草寺も世田谷の森厳寺も、針供養が行われるのは境内にある淡島堂である。

江戸時代末の滝沢馬琴編『俳諧歳時記栞草』[8]の「二月八日　事始め」の項には「婦人は、針の折れたるを集めて淡島の社へ納め、一日、糸針の業を停む。是を針供養と云」とある。当時の江戸では、コト八日の日に針仕事を休み、折れた針を淡島様に納めるということが一般的

に行われていたことになる。

淡島神社の本社は和歌山市加太にあり、その祭神の少彦名命は医薬神、航海神として信仰を集めていたが、近世になって婦人病や安産などの女性を救済する神として一般に広まった。同社では針供養と並んで、三月三日に行われる流し雛の行事もまた多くの女性の信仰を集めている。

淡島神社には二つの縁起が残されており、針供養との結びつきについても二つの伝承がある。一つは淡島神社の祭神であるが少彦名命が裁縫の道を初めて教えた神という伝承によるものである。

もう一つは、淡島神社の祭神が婆利才女（ハリサイジョ）だからというのである。この神はもと住吉神の妃であったが、帯下の病のために不縁となり、綾の巻物と十二の神宝とともに船に乗せられ海へ流され、三月三日に流れついた地が加太であったという。そこで巻物から雛形（人形）を作り、病を取り除くために海に流し、婦人の病に苦しむ者を助けることを誓ったという。また、この雛形を作ったのが雛遊びの始まりとも伝えられている。このことから、女性の救済神として女性の信仰を集め、また祭神が婆利才女（ハリサイジョ）という名前で、ハリ＝針と同じ音であることから針供養と結びついたという。近世において、淡島信仰を全国に広めて歩いたのが、淡島願人と呼ばれる乞食で、彼らが広めたのが後者の縁起である。

針供養はもともと、もの忌みの日として針仕事を休み、その後に行事としての針供養ができあがり、その習俗と淡島信仰が結びついたと考えられる。

二　裁縫所における針供養

本稿の主題となる裁縫所における針供養について、千葉県内各地の裁縫所で行われていた、昭和一〇年代から四〇年代半ばまでの針供養の様子を紹介する。いずれも筆者の調査によるものである。

最初に佐原の裁縫所の事例である。裁縫所は農村部と町場でその様子が異なる。[9] 佐原は利根川の水運で栄えた町で、茨城南部から千葉県北部随一の町を形成しており、その裁縫所は町場の裁縫所としての性格を有している。裁縫所の多くは裁縫を教えるだけではなく、仕立屋として近隣の呉服店などからの仕立物もしていた。特に佐原の場合は大きな町場であり、呉服店からの仕事も数多くこなしていた。裁縫所は学校ではないので、裁縫所に通う期間は生徒の都合によって決める事ができる。自宅が農家の場合には、農繁期には裁縫所に通うことが難しい。だから、裁縫所には秋から冬にかけての農閑期に多くの生徒が集まる。町場の裁縫所の大きな特色となるが、生徒は徒歩圏だけではなくかなり遠くから来ていて、寄宿をして裁縫を習う生徒がいたり、裁縫所によっては花嫁修業ではなく仕立職人になるために年季で来ている生徒もいた。

事例一　佐原市佐原・O裁縫所（昭和三〇～四〇年代はじめ）
多い時には五〇人以上の生徒が通って来ていた。二月八日の針供養には、生徒の代表数名が折れた針を諏訪神社にある淡島様（淡島神社）へ納めに行った。また、先生は「手作りで何かやりなさい」といくらかのお金を生徒に渡し、生徒は自分たちで買い出しに行って、簡単なご馳走を作って食べた。仕事は休みである。

事例二　佐原市佐原・T裁縫所（昭和三〇～四〇年代はじめ）
多いときには五〇名を越える生徒がいた。生徒の中には二月八日になると、春の農作業の準備のために帰ってしまう人がいるので、一月の成人の日頃に針供養をした。折れた針を生徒全員で諏訪神社にある淡島神社まで持って行き、その後は新年会を兼ねて簡単なごちそうを食べた。

続いて同じ町場である八街の裁縫所の事例である。八街は佐原ほどの大きな町ではないが、農村部にある小さな町である。寄宿の生徒まではいないが、かなりの遠方から通って来ていたし、裁縫所の規模も大きく、町内には数多くの裁縫所があった。

事例三　八街市八街・I裁縫所（昭和一五年～四〇年頃）
裁縫所で針供養をしたことはなかった。しかし、先生と生徒で浅草の浅草寺の針供養へは数回行っている。いつ頃、何回位行ったかは不明である。

次は農村部の裁縫所での事例を紹介する。農村部の裁縫所の場合には、生徒は近隣の地区から徒歩で通ってくるし、一つの裁縫所に集まる生徒の数も町場の裁縫所に比べて少ない。

事例四　多古町水戸・S裁縫所（昭和一〇年代）
正月二五日にお豆腐を買ってきて折れた針をさした。針供養ではなく天神講と呼んでいた。生徒全員で鎮守の三柱大神に針をさした豆腐を供える。「針が豆腐に通るように、なめらかに運針ができますように」と祈願する。その後、針をさした豆腐を川へ流した。その日は裁縫をしない。裁縫所に戻り生徒が太巻き寿司や混ぜご飯などのごちそうを作ってみんなで食べた。

事例五　君津市正木・M裁縫所（君津市正木・昭和七、八年頃）
針供養は行わなかった。また、裁縫が上達するようにとお参りにも行かなかった。

事例六　九十九里町真亀（昭和二〇年代）
裁縫所生徒の代表数名と先生が西野にある淡島様（淡島神社）に針を

納めに行った。それ以外の事は何もしなかった。いつもと同じように縫い物をしていた。

事例七　大網白里町大網・A裁縫所（昭和二〇年代）

毎年二月頃に針供養を行った。大きな豆腐を買ってきてお盆に載せ、それに折れた針を生徒が順番にさしていった。この日は針仕事を一日休み、茶話会をした。

裁縫所によって針供養の行事の様子は違っていた事がわかる。事例五のように針供養を全く行わないとい所や、事例六のように代表が針を納めに行くだけで、それ以外の事は何も行わないという例もある。針供養は、裁縫所であれば必ず行う行事でなかったことがわかる。

全く行わないという裁縫所を除くと、針供養は針を納める行為と、生徒が裁縫の手を休め一日楽しく過ごしたという二点に集約できる。

まず一点目の針を納める行為について注目をすると、針を納める場として、淡島神社（事例一、二、六）と川へ流す（事例四）という二つがある。淡島神社は前述のように、針供養との結び付きの強い神社である。川へ流すことは先に紹介した会津若松市の事例にもあり、特殊な事例というわけではない。

事例一、二の佐原の例では、諏訪神社境内の淡島神社に針を納めている。ところが、厳密には諏訪神社境内に淡島神社はない。しかし、諏訪神社の鳥居を入ると石段があり、その石段の途中のごく目立たない所に小さな淡島様の祠がある。同社の神主さんの話では、この淡島様の祠には佐原の花街の女性達が訪れる事はあっても、針が納められていた事はないという。しかし、石段を登りつめた諏訪神社の社殿の左側にある天満宮には、たびたび針が納められていたという。T裁縫所の事例に出てくる淡島神社の場所は、この天満宮の場所にあたる。

天満宮、天神様は学問の神様である。古くは寺子屋で手習いを学ぶ生徒たちの信仰の対象であり、裁縫塾に通う生徒たちの信仰の対象となってもおかしくはないだろう。事例四でも、天神講が針供養と習合しているし、裁縫塾の様子を描いた絵馬が天満宮に奉納されている例がある。千葉県内の例では大網白里町柳橋の天満神社には、明治のものと考えられる裁縫塾の様子を描いた絵馬が奉納されている。[10]

諏訪神社境内の天満宮と淡島神社の混同は、学業（裁縫技術）の成就を願う対象としての天満宮と、針供養の対象としての淡島神社とが習合した結果と考えられる。

事例六にある九十九里町西野の淡島神社は個人の屋敷神として祀られているものであるが、同社には二八枚の裁縫塾の様子を描いた大絵馬が奉納されている。[11] これらの絵馬は幕末から明治二〇年代にかけて奉納されたものであるが、うち一枚は奉納日が二月八日である。この淡島神社の縁日は毎月三日、大祭が正月二日と三日であるから、意識的に針供養の日に奉納しているのだろう。奉納年、奉納者については、

古くなってしまって銘文で確認することはできないが、他の絵馬が幕末から明治期のものであるから、この絵馬もその時期に奉納されたと考えられる。幕末から明治期には、この淡島神社へ針供養の際に針を納めていたのだろう。

さて、針を淡島神社や天満宮に納めたり、川へながしているが、最終的にそれらの針はどう処理されるのか。

淡島神社や天満宮に納めるという言い方をするが、厳密には神社に持参して社殿に供えるといった方が適切である。佐原の諏訪神社の宮司さんによれば、天満宮に納められた針は特にどこかへ埋めるという事はなく、そのまま風にとばされ自然に朽ちていったという。一方S裁縫所の先生によれば、川へ流した針についてその後の事は知らないという。やはり、川へ流された針は、そのままどこかへ流れ着き、自然に朽ちていったのだろう。針は神社に納めたり、流したりはするが、最終的に埋めるなどの処理はしていなかった。現在では針を流したり、自然に朽ちるのを待つという行為は危険であり、とても考えられないが、昭和三〇年代頃までの針の処分方法としては一般的だったようだ。

針供養のもう一つの側面は、生徒が裁縫の手を休め一日楽しく過ごしたことである。裁縫所は若い同年代の女性が集まる場である。裁縫をしている時にはあまりおしゃべりはできないかもしれないが、針供養の日には思う存分おしゃべりに花を咲かす事ができる。普段の裁縫所での生活とは違った一日であったろう。佐原の話ではないが、昭和はじめに千葉市の裁縫女学校で裁縫を習っていた女性は、その当時の楽しかった事を夢に見るという。裁縫を習っている時期は、当時の女性に許された楽しい数年であった。その中でも、針供養は一日針の手を休めて、みなで飲食をして過ごす特別な日であった。

事例一では針を納めに行くのは、生徒の代表である。針を納めるという事は、あまり重要視していない事がわかる。裁縫所における針供養では、裁縫の手を休め楽しく過ごすということの方が重要だった。針供養は、裁縫所に通う生徒のための行事であった。

三　針塚の登場

浅草寺淡島堂や正受院、木更津成就寺などテレビで放映されたり新聞記事となっている針供養では、これらの社寺に「針塚」があり、針は針塚の前で供養されたり、針塚の下に埋納されたりしている。前節で見た昭和一〇年代から四〇年代半ばまで裁縫所で行われていた針供養とその様子は異なる。

新宿の正受院と浅草寺淡島堂での針供養について長沢利明氏の報告をもとに、その針供養の様子を紹介する。

正受院にある奪衣婆は咳封じの祈願対象として江戸時代以来信仰を集めて来たが、昭和三二年（一九五七）に東京和服裁縫組合が針塚を正受院境内に建立したことがきっかけとなり針供養祭が催されるよう

になった。針供養には参詣者が針塚前に置かれた豆腐に針を刺し、奪衣婆に参拝していく。また、和服に着飾った若い女性たちによる針供養行列パレードが行われ、その際小さな奪衣婆像をかついで新宿二丁目周辺を巡行する。針塚の建立をきっかけに、奪衣婆信仰と針供養が結び付き、[12] 寺院の行事として全く新しい針供養が創出され、発展していったといえるだろう。

また、浅草寺淡島堂において、現在のような寺院の行事としての針供養が行われるようになったのは一九三〇年代と新しく、その行事には和裁団体である大東京和服裁縫教師会が深く関与している。そして、昭和五七年（一九八二）には同会が設立五〇周年を記念して「針供養之塔」を建立した。現在二月八日の針供養の際には関係者が「針供養之塔」の前に集まり法要をおこなっている。[13]

正受院、浅草寺淡島堂ともに現在は盛大な針供養を行っているが、そういった行事が比較的新しく、行事には和裁関係団体が関与している。また、針塚あるいは針供養之塔の前に置かれた豆腐に針を刺したり、その場で供養が行われるなど「針塚」が針供養の行事において重要な位置をしめている。

ここで「針塚」として記したが、針供養の意味を込めて建立された石碑などで、その石の下の土中に針を埋納する施設をもったり、あるいはその前で針供養が行われるものを「針塚」と呼ぶ事にする。石碑等に刻まれている文字は必ずしも「針塚」ではなく、浅草寺淡島堂のように「針供養之塔」となっているものもある。

表一は筆者が実物を確認した「針塚」の一覧である。筆者が実見したものだけを対象としたため地域的な偏りがあるが、インターネットで「針塚」を検索すると、表一にはない針塚が多くヒットし、全国にかなり多くの針塚がある。

表一から針塚の建立の主体は、正受院や浅草寺淡島堂同様に針を使う和裁や洋裁業の同業者団体、針を使う企業、裁縫学校などで、針に関係する諸団体が多いことがわかる。最近では針に限らず、ハサミ、人形、時計、茶筅など様々な器物の供養が行われているが、その多くが、関連する同業者団体や企業の主催によるものである。

たとえば、ハサミ供養は昭和五二年（一九七七）から行われているが、主催は学校法人山野学苑で、その発案者である山野愛子は一大美容産業集団である山野グループを作りあげた人物である。[14] また、現在全国各地で行われている人形供養には人形業界が関与しているものが多いという。[15] そして、これら企業や団体の後援や主催になる器物の供養には、集団の結束を固める役割や、記念事業的な意味が多分に含まれているという。[16]

正受院の針塚は東京和服裁縫組合が全国組織である社団法人日本和裁技術士会に発展改組されたのを機会に、業界の繁栄と裁縫針への感謝の意を表しまつられた。そして、針塚建立が契機となって、同団体が関与する形で針供養行われた。針塚は業界の発展のシンボルであり、

表一　針塚一覧

所在地			建立年	建立の主体	名称
千葉県	佐原市	浄国寺	昭和四五	佐原裁縫教授会	針塚
千葉県	八街市	稲荷神社	昭和四三	八街裁縫睦会	針塚
千葉県	館山市	那古寺	昭和四一	安房郡市和裁教授会	針塚
千葉県	東金市	最福寺	昭和二七	日東株式会社東金支店・石井繊維工業	お針供養塔
千葉県	木更津市	成就寺	昭和六	講元成就寺住職、和服裁縫、洋服裁縫、足袋業	針供養の塔
宮城県	仙台市	櫻岡神社	昭和六〇	社団法人日本和裁士会宮城県支部	針の碑
宮城県	仙台市	長谷柳絮裁縫学校	昭和四九	長谷柳絮裁縫学校	針塚
東京都	台東区	浅草寺内淡島堂	昭和五七	大東京和服裁縫教師会・全国和裁団体連合会	針供養の塔
東京都	世田谷区	森厳寺内淡島堂	昭和一一	大東京和服裁縫教師会	針塚
東京都	新宿区	正受院	昭和三二	社団法人日本和裁技術士会	針塚
和歌山県	和歌山市	淡島神社	不明	淡島神社	針塚
大阪府	大阪市	大阪天満宮内吉備神社	大正一五	大阪和服商業組合・大阪刺繍業有志	針塚
兵庫県	神戸市	厳島神社内淡島神社	明治七	厳島神社	針塚

針供養の行事も業界団体の記念事業的な意味合いを持って生まれたと言って良いだろう。

また、浅草寺淡島堂の場合も「針供養之塔」は大東京和服裁縫教師会が設立五〇周年を記念して建立しており、団体の記念碑的な意味が強い。そして、その場で同団体が針供養の法要を営んでおり、その針供養も集団の結束を固める意味合いを含んでいるのではないだろうか。「針塚」を中心に同業者団体の関与により針供養が営まれている。「針塚」は組合の発展のシンボルであり、針供養行事は集団の結束を固める役割りを果たしている。

四　佐原の針塚

佐原でも昭和四五年（一九七〇）に針塚が建立される。建立の主体は裁縫所の同業者団体佐原裁縫教授会である。教授会の始まりは、昭

和一七年（一九四二）頃に呉服屋と仕立物の工賃の交渉を団体でおこなった事による。教授会では他に生徒の月謝や寄宿料の統一を行ったり、裁縫所の修了者に対して修了証の授与などをした。

佐原裁縫教授会が針塚の建立を考えたのは、千葉県内の八街に針塚が建立されたことに刺激を受けてのようだ。八街の針塚は昭和四三年（一九六八）に八街和服裁縫睦会によって八街市三区の稲荷神社境内に建立された。八街和服裁縫睦会は佐原裁縫教授会と同じ、裁縫所の同業者団体である。昭和三六年（一九六一）に裁縫所の月謝の統一がきっかけで結成された。

針塚の建立は睦会の中心メンバーであったU先生の発案であるが、U先生はすでに故人となってしまっており、なぜ針塚の建立に積極的だったかはわからない。

針塚建立に向けた活動をはじめたのが、千葉県和裁連合会に加盟した昭和四一年（一九六六）頃からだ。八街の裁縫所の先生の多くは、八街市三区に住んでいるため、三区の青年館のある稲荷神社境内に針塚を建立することを希望した。しかし、針塚は針を納めるためのものである。稲荷神社境内は子どもの遊び場にもなっているので、針が針塚の外に出てしまうと危険であるとの理由から反対があり、なかなか実現しなかった。しかし、最終的には睦会側の粘り強い説得活動により、希望地である稲荷神社境内に建立することが許可された。

建立にあたっては発起人として八街和服裁縫睦会が中心となり、千葉県洋服商工業組合八街支部、八街商工会議所、八街町三区の共賛のもと、八街市街を中心に建立資金の寄付を集めて歩いた。この時持参した「針塚建立趣意書」[17]には、「天然石の針塚の下にミシン針から縫針、編針、注射針、畳針など不要になった針を投入してその労に感謝し併せてけがや誤ちのないよう祈願し業者並びに一般婦人各位のおもむくところとしたいと思います。」とあり、和裁に使った針だけではなく編み針、畳針、医療用の注射針までも含めて供養をしようというものであった。供養する針の範囲を広げるという事は、針塚の建立に賛同してくれる人の幅が広がると考えたからだろう。

こうして募った寄付をもとに、昭和四三年一〇月一三日、ついに針塚が稲荷神社境内に建立された。

佐原の針塚は八街の針塚建立に遅れること二年、昭和四五年に当時裁縫教授会の会長であったO先生が中心になって建立した。針塚は佐原にある浄国寺という寺院内の墓地の一画にある。

佐原の針塚は八街の針塚に刺激を受けて建立を考えたという事以外、その建立の理由ははっきりしない。建立の時点で先の正受院や浅草寺淡島堂のように、団体の記念碑的な意味を強く意識したということはないようだ。

針塚の裏面には「建立の由来」として以下の文章が刻まれている。

佐原針塚「建立の由来」

私達はこの世に生まれた瞬間からその一生を終わる迄衣服の世話になっているのであります。その衣服はいずれも針の働きによって作られたものである事は御承知のとおりであります。日常の衣服はもちろん生まれてすぐ用いる産着から哀服に至る迄何れも針の恩恵であります。その針を司る和洋裁の業者はもちろん作られた衣服を着る一般の人々も針に感謝しなければなりません。針の動きは衣服ばかりでなく安眠を得る寝具、室内の畳、帽子、足袋等及び生命を守る注射針に至る迄数え来れば限りない針の恩恵に浴している訳であります。又いかなる家庭に於いても針を用いない家庭はありません即ち針の恩恵なくしては一日たりとも生活はできません。ここに於いて針に感謝する意味から針供養をいたすべく佐原裁縫教授会が中心となり衣服に関係する業者と相計り針塚を建立した次第であります。

昭和四十五年二月八日

この後に、発起人として佐原裁縫教授会の当時の会員一五名が名を連ねている。我々の日常生活が針の恩恵によるものであることを説き、「衣服に関係する業者と相計り」佐原裁縫教授会が中心になってこの針塚を建立したとある。針塚の建立の理由として、「針に感謝する意味から針供養をいたすべく」とあり、針供養の場としての針塚である事を説いている。

針塚の周りには、「衣服に関係する業者」の名前が刻まれている。佐原呉服商組合、佐原洋服組合、佐原染物組合、佐原編物組合、佐原紋章組合と衣服に関する業者の組合の名が、また佐原市内の洋裁学校、その他個人の名前がみえる。建立にあたり、これらの「衣服に関係する業者」から寄付を受けた事がわかる。正受院や浅草寺淡島堂の「針塚」でも賛同団体として多数の衣類に関する団体の名が「針塚」に刻まれている。針塚を建立するにはかなりの額の費用が必要となるから、教授会単独ではなかなか難しい、そこで「衣服に関係する業者と相計」る必要が生じる。

千葉市の和裁協和会では昭和四〇年代に針塚の建立を考えた事があったが、協和会だけでは資金的に厳しく「針」に関わる団体に賛同を呼びかけたが、不調に終わり針塚を建立する事はできなかった。和裁の同業者団体が針塚建立を計画しても、他の団体からの賛同が得られなければ実際に建立することは困難であった。

このようにして針塚が完成した昭和四五年二月八日、浄国寺において初めての針供養が行われた。針塚建立がきっかけとなって、それまで針供養とは縁のなかった寺院において、針供養の行事が行われるようになったのである。新たな行事が生みだされたと言ってよいだろう。この時の針供養は佐原裁縫教授会主催の針供養であり、寺院の行事としては位置づけられてはいなかった。

五　針塚以後の佐原の針供養

針供養が裁縫教授会の主催で浄国寺で行われるようになったことで、それまで各裁縫所で行っていた行事が、裁縫所の団体である裁縫教授会の行事へと大きく変化した。

現在でも裁縫教授会の関わる行事として、毎年二月八日に浄国寺で行われている針供養について、平成一四年（二〇〇二）二月八日に筆者が調査したときの様子をもとに紹介する。

写真１　飾り付けされた針塚

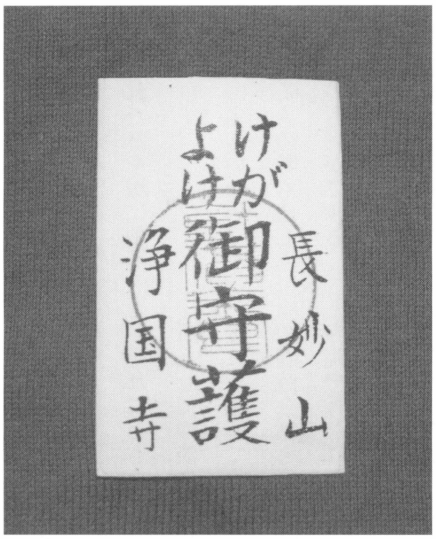

写真２　「けがよけ」のお守り

写真３　針塚にお参り

針供養当日、教授会の会員によって針塚に折り鶴の飾りつけがおこなわれ、幟が針塚周辺に立てられる（写真１）。針塚の前には豆腐が置かれ、一般の参詣者が針を持って訪れても針を納める事ができるようになっている。また、針供養にちなみ「けがよけ」のお守り（写真２）を教授会が販売しているので、それを買いに来る人の姿もちらほらとある。また、教授会から参詣者に甘酒が振る舞われていた。

教授会の会員が参列して本堂で針供養の法要が執り行われた。法要の最後に住職からのお話があった。この年は、昭和四五年にはじめて浄国寺で針供養が行われるようになってから、三三回目にあたる。年

忌供養でいえば三三回忌にあたり、一つの節目であるとのお話だった。法要終了後、参加した会員全員で針塚にお参りをした（写真3）。その後は場所を移して教授会の新年会を行った。新年会終了後、針塚に供えられた針を針塚の下の施設に納める。針塚は墓と同じ構造になっているため、石屋さんに来てもらい、塚の前に供えられた針を塚に納め、針供養の終了となる。

現在では裁縫所の数も減っているので、会員数は一〇名もいない。針供養に参列する人の数も少ないし、針を納めに訪れる人の数も決して多くはない。東京都内の浅草寺などのように参詣者の行列ができる程の針供養とは趣を異にはする。しかし、和裁関係団体が関与して寺院で行われ、一般の参詣者が折れた針を持って訪れるなど、浅草寺などで行われる針供養行事と大きな違いはない。

教授会の会員数も減り、針供養の参加者数も少ないので、現在の針供養は昭和四五年に初めて行なわれた針供養に比べて賑やかさには欠けるだろう。しかし、現在の針供養の行事の流れは、浄国寺に針塚が完成した昭和四五年当時からほぼ同じ形で続いている。

針塚建立以後に行われるようになったこの針供養と、建立以前の針供養について比べてみよう。

個々の裁縫所ごとに行われていたものが、裁縫所が集まって一カ所で行われるようになった。裁縫所というのは企業ではない、仕立職人の家と言った方がよいだろう。針供養はそういった家々において、別々に行われていた。だから、同じ佐原の裁縫所であっても事例一、二のように針供養の様子は裁縫所によって違いがあった。それが、佐原にある裁縫所が一斉に集って針供養を行う事になった。裁縫所毎の家内の行事であったものが、集団の行事へと変化した。

それにともなって針供養の行われる場所がかわった。針を納める場所としての淡島神社（実際には天満宮）が針塚へ変わり、針を納めた後に裁縫所で行われていた生徒の茶話会は、料亭で行われる先生同士の親睦会へと変わった。また、以前は行われなかった針供養の法要が寺院で行われるようになり、「供養」という行為に重きが置かれるようになった。

これらの変化は単に個々で行われていた行事が、一カ所に集合して行なわれるようになったり、行事の行われる場所が変わったという、目で見える変化にとどまっているわけではない。針供養という行事のもっと本質的な部分の変化を引き起こしている。

各裁縫所で行われていた頃は、裁縫所に集まる生徒達がその日だけは針を休め、裁縫の上達を祈願するとともに、話をしたり、ごちそうを食べたりして楽しく過ごす日であった。つまり、裁縫所に集まる生徒のための行事であった。それが、針塚建立以後は針供養から裁縫所の生徒の姿は消えてしまい、裁縫所を主宰する先生中心の、先生同士の親睦を深めるための行事に変化をしてしまっている。これは、針供養の本質的な部分での変化といえよう。

そして、供養される針に注目をすれば、針の最終処分の場としての針塚が登場する。以前は社殿前に置いたり、川に流して自然に朽ちていくままにまかせていたものが、塚の下に埋納する。埋納するということは、そこから針が出て行くことは想定していない。針塚に埋納することで針の最終処分をする。

そして、かつては針を豆腐にさし、淡島神社（実際には天満宮）に供える事で供養と考えていたものが、淡島神社とはまったく関係のない浄国寺という寺院において、新たに針供養の法要を開始した。「供養」という行為が強調されるようになり、それまでの針供養の様式とは全く別ものの、新しい形の針供養を創出している。

針塚以前と以後では、別の行事と言ってもよいほど変化をしている。そして、この変化した「針供養」は一般の参詣者が訪れるなど、ある程度地域に浸透している。裁縫所の内部の生徒のための行事が、裁縫所の団体である教授会主催の新しい行事となり、その行事への地域の人々の参詣という新たな信仰を生みだした。

六　変化の背景

このように針供養が変化した背景は何だったのか。針塚の建立についてみれば、佐原の針塚は八街に刺激を受けたらしいが、その八街での針塚の建立についてもその理由はよくわからない。針塚背面の「建立の由来」からは「針に感謝する」意味を込めて建立が必要であると考えたこと以外は記されていない。

世田谷の森厳寺の針塚の建立は昭和一一年（一九三六）であるが、その建立主体は大東京和服裁縫教師会である。大東京和服裁縫教師会は全国組織である全国和裁団体連合会に加盟しているが、佐原裁縫教授会も八街和服裁縫睦会も同じ全国和裁団体連合会に加盟している。だから、大東京和服裁縫教師会で針塚を建立している事を知っていたことも考えられる。そこで、自分たちの団体でも建立を考えたのかもしれない。表一の針塚一覧が示すように、針塚の建立主体の多くが和裁関連団体である。和裁団体の間で針塚の建立が流行したことも考えられるだろう。

針塚の建立にともなって針供養が個々の裁縫所から外に出ることになり、針供養行事の中心であった生徒の姿がなくなってしまった。では、生徒達はどうしたのか。表二は佐原のO裁縫所とT裁縫所における、年毎の入所者数の推移である。O裁縫所では昭和三一年（一九五六）以前の資料が残されていないので、それ以前について年毎の入所者数を知ることはできない。表から裁縫所の入所者数のピークは昭和二〇年代後半から三〇年頃であることがわかる。そして、昭和三〇年代半ばから徐々に少なくなり、針塚の完成した昭和四五年には両裁縫所ともに入所者数は一桁となっている。針塚が建立された時期は、裁縫所から生徒の数が極端に減少していった時期と重なる。つまり、生

表二　年毎の入所者数

	O裁縫所	T裁縫所
昭和一五年		一〇
昭和一六年		一三
昭和一七年		五一
昭和一八年		一二
昭和一九年		三一
昭和二〇年		三〇
昭和二一年		四五
昭和二二年		二五
昭和二三年		二六
昭和二四年		四一
昭和二五年		三一
昭和二六年		三六
昭和二七年		四四
昭和二八年		二九
昭和二九年		五三
昭和三〇年		三五
昭和三一年	四九	三五
昭和三二年	二六	三八
昭和三三年	二二	三〇
昭和三四年	一六	二四
昭和三五年	二一	一九
昭和三六年	二四	一七
昭和三七年	一二	一九
昭和三八年	一六	一八
昭和三九年	二〇	一五
昭和四〇年	一三	二〇
昭和四一年	一九	一七
昭和四二年	二〇	一〇
昭和四三年	一四	一二
昭和四四年	一三	二〇
昭和四五年	八	八
昭和四六年	一三	八
昭和四七年	七	三
昭和四八年	六	七
昭和四九年	三	五
昭和五〇年	四	一〇
昭和五一年	五	〇
昭和五二年	五	六
昭和五三年	三	〇
昭和五四年	六	一
昭和五五年	五	〇
昭和五六年	三	一
昭和五七年	一	三
昭和五八年	三	〇
昭和五九年	二	一
昭和六〇年	〇	〇
昭和六一年	〇	〇
昭和六二年	〇	〇
昭和六三年	二	一
合計	三六一	八六〇

島立理子「『まち』の裁縫所―その特色と役割―」より一部変更（『民具研究』一二八　二〇〇三年）

表三　O裁縫所における年季生の割合

	年季生数	年季生の割合
昭和三一年	五	一〇％
昭和三二年	二	八％
昭和三三年	四	一八％
昭和三四年	一	六％
昭和三五年	二	一〇％
昭和三六年	二	八％
昭和三七年	二	一七％
昭和三八年	三	一九％
昭和三九年	六	三〇％
昭和四〇年	三	二三％
昭和四一年	五	二六％
昭和四二年	七	三五％
昭和四三年	四	二九％
昭和四四年	一	八％
昭和四五年	〇	〇％
昭和四六年	四	三一％
昭和四七年	三	四三％
昭和四八年	三	五〇％
昭和四九年	二	六七％
昭和五〇年	二	五〇％
昭和五一年	二	四〇％
昭和五二年	一	二〇％
昭和五三年	一	三三％
合計	六五	

徒中心の針供養が先生中心の針供養に変わった時期は、裁縫所から生徒の姿がなくなった時期でもあった。

生徒の減少は、花嫁修業として裁縫を習うことが少なくなった事を示している。そして、衣類の縫製や修繕が家々の外に出てしまった事をも意味する。

O裁縫所には花嫁修業として裁縫を習いに来る生徒の他に、年季生と呼ばれる仕立職人を目指す生徒もいた。表三はO裁縫所における年毎の年季生の入所者数と、全入所者にしめる年季生の割合である。昭和四〇年代に入ると全生徒の中で年季生のしめる割合が増えてくる。花嫁修業として裁縫を習いに来る生徒は減るが、職人として本格的に裁縫を修得しに来る生徒は増えている。家内で衣類を縫う事は少なくなり、普段着として和服を身につける人が減っても、「よそゆき」には和服を着る機会があったし、そういった和服は仕立屋に頼んで縫ってもらった。裁縫所は仕立屋でもあったから、生徒の数が減っても仕立屋としての仕事は残っている。

花嫁修業として裁縫を習いに来る生徒が減った事により、総合的な女子教育の機関としての裁縫所の性格は薄れ、若い女性が集う華やかな裁縫所の時代は終わるが、仕立屋としてはまだまだ十分に機能していた。針塚建立の頃、裁縫所は仕立屋としての性格を強く有していたのである。

また、生徒が減ったことにより、生徒の指導をする時間がなくなった。一時期は毎年四、五〇人の新規入所者を迎えて、それに前年度からひき続き通ってきている生徒を加えれば、かなり多くの生徒が一つの裁縫所に通ってきていた事になる。どこの裁縫所でも、先生が一人でこれらの生徒を指導していたから、かなり忙しかったはずである。T先生によればその忙しさは、お手洗いに行く暇もないほどだったという。

生徒の数も減り、忙しさが一段落する。裁縫所の性格も以前とは変化してきた。今後は仕立屋として裁縫所を充実させていかなくてはならない。裁縫所の今後について考える余裕も、必要も出てきた。佐原裁縫教授会は仕立屋の同業者団体として、新たな結束を考える時期であった。そして同時に、日頃お世話になっている針を大切にしよう、供養をしようと考える余裕も出てきたのだろう。

佐原の場合、針塚の建立に団体の再結成を特に意識したわけではないようだが、教授会の会員が共同で針塚を建て、一緒に針供養を行い、その後は新年会を兼ねた親睦会を行う。これら一連の行事は、結果的に団体の結束を固める役割を果たしたに違いない。

針塚は団体の象徴であり、針供養には会員がその象徴の前に集う。針供養は会員相互の親睦のための行事となった。新たに生みだされた器物の供養が、集団の集結の象徴として意味合いを有し、その行事は年に一回の関係者の親睦を深めるといった側面を有しているとの大崎智子氏[18]による指摘があるが、佐原の針供養についても同様の事が言

えるだろう。針供養は他の器物の供養に比べ古くから行われており、それらとは違った性格を有しているかのように考えがちである。しかし、針供養もまた時代とともに変化し、他の器物の供養同様にそういった性格を有するようになっていた。

もう一つの針塚建立の背景として、針が危険物として意識されるようになった事が考えられる。八街の針塚建立にあたって、「子どもが遊ぶ稲荷神社境内に針を埋めるのは危険ではないか」との理由から反対があった。そこには針が危険との意識がある。針塚建立以前の佐原では、天満宮に豆腐に刺した針を放置していた。昭和一〇年代の多古町では豆腐に刺した針を川に流していた。つまり、針は自然に朽ちるがままになっていた。針が子どもの遊び場に流れついたとしても、それほど意識はされていなかったのである。また、裁縫所では針仕事をしている部屋で寄宿生が寝泊まりをしていた。一日の裁縫が終わった後に掃除はするものの、針が落ちていないという保証はない。しかし、「裁縫をする人に針は刺さらない」と言われていて、針が落ちているかもしれない部屋でも平気で寝ていた。針が危険物であるとの認識は現在ほど強くはなかった。

それが、八街の事例のように時代の流れとともに針が危険物であると強く意識されていく。針を従来のように放置しにくい状況が生まれる。お盆の供物や七夕飾りは以前は川に流していたが、現在では川に流せなくなった。しかし、他のゴミと一緒に捨てる事には抵抗があり、焼いて処分するようになった例もある。[19] 針についても、従来のように川に流したり、放置する事ができなくなった時、廃棄物、ゴミとして廃棄するのは気が引ける。針は七夕飾りのように燃やす事はできない、そこで、新たに針を処理する場が必要になる。針塚建立の背景には、最終処理の場を作る必要もまたあったのかもしれない。

まとめ

佐原の裁縫所において、裁縫所が多くの生徒を集め女性の総合教育機関として機能していた頃、針供養は針に感謝し裁縫の上達を祈願するとともに、生徒たちが楽しく過ごす行事であった。それが、昭和四五年の針塚の建立で様変わりをした。針塚の建立、針供養の法要、針塚への一般の参詣者。全く新しい針供養を生みだした。その背景には裁縫所の性格の変化がある。花嫁修業として裁縫を習いに来る人が減った事により、一人前の女性となるための教育を施す、総合的な女子教育の機関としての機能はなくなった。針供養の変容の背景は、花嫁修業としての裁縫を教える場の終焉を意味する。しかし、裁縫所は仕立屋としては機能していた。針供養は仕立屋としての裁縫所の集団による行事へと変化した。

表二によれば、昭和六〇年以降O、T裁縫所ともに生徒が極端に少なくなってくる。現在では両裁縫所とも生徒はいない。仕立職人を目

指す生徒もいなくなった。現在O裁縫所では二代目のO先生と、かつての生徒一人で仕立ての仕事をしている。仕立ての仕事も数が減っている。安価な海外縫製、人々の和服離れなど裁縫所を取り巻く状況は容易ならざるものがある。佐原の裁縫所の数も少なくなっている。

現在佐原では前述のように針供養を行ってはいるが、集まる会員の数も年々少なくなっている。針供養は教授会の行事としてだけではなく、浄国寺の寺の行事の一つとして組み込まれた。

八街の裁縫所ではもともと針供養を行っていなかったが、針塚建立を機に八街和服裁縫睦会主催により針供養が行われるようになった。しかし、裁縫所の減少により平成一〇年（一九九八）頃を最後に針供養は行われなくなってしまった。

佐原の場合は教授会が関わらなくなったとしても、寺の行事として続くことになっている。今後の裁縫所の減少によっては、裁縫所の団体の行事としての性格を有する針供養は、寺の行事としての針供養へとまた大きく変化していくのかもしれない。

注

（1）島立理子「『まち』の裁縫所－その特色と役割－」（『民具研究』一二八　日本民具学会　二〇〇三年）、「ひながたにみる明治末千葉県佐原の裁縫所」（『民具マンスリー』三二－二　神奈川大学常民文化研究所　一九九九年）、「久保木裁縫所資料について」（『町と村調査研究』二　千葉県立房総のむら　一九九九年）

（2）長沢利明「針供養と奪衣婆－東京都新宿区新宿・正受院－」（『日本民俗学』一七八　日本民俗学会　一九八九年）

（3）長沢利明「浅草の針供養－東京都台東区浅草淡島堂－」（『西郊民俗』一二四　西郊民俗談話会　一九八八年）

（4）新村出編『広辞苑　第四版』岩波書店　一九九一年

（5）（財）民俗学研究所編『改訂　綜合日本民俗語彙』（平凡社　一九五五年）「針供養」の項による

（6）若松市役所編『若松市史　上巻』（一九三一年）（国書刊行会より、一九八七年に復刻）

（7）前掲（5）『改訂　綜合日本民俗語彙』「針歳暮」の項による

（8）滝沢馬琴編　藍亭青藍補　堀切実校注『増補　俳諧歳時記栞草（上）』岩波書店（岩波文庫）二〇〇〇年

（9）町場の裁縫所の特色については「『まち』の裁縫所－その特色と役割－」（『民具研究』一二八　日本民具学会　二〇〇三年）で、農村部の特色については島立理子「『むら』の裁縫所」（『町と村調査研究』三　千葉県立房総のむら　二〇〇〇年）においてそれぞれ論じている。

（10）千葉県教育庁生涯学習部文化課『千葉県文化財実態調査報告書－絵馬・奉納額・建築彫刻－』一九九六年

（11）九十九里町西野の淡島神社の絵馬については菅原千華「淡島信仰と近代の裁縫所－東金市・九十九里町の淡島神社奉納絵馬より－」（『民具研究』一二五　日本民具学会　二〇〇二年）がある。

（12）前掲（2）長沢利明氏論文

（13）前掲（3）長沢利明氏論文

（14）大崎智子「ハサミ供養をめぐって－東京都港区芝・増上寺－」（『民具

マンスリー』三〇－一　神奈川大学常民文化研究所　一九九七年）

（15）大崎智子「上野寛永寺清水観音堂の人形供養」（『日本民俗学』二〇一　日本民俗学会　一九九五年）

（16）前掲（15）大崎智子氏論文

（17）石井とめ氏蔵

（18）前掲（15）大崎智子氏論文

（19）七夕やお盆のこうした廃棄の変化については島立理子「子供の行事『七夕』」（「平成11・12年度企画展示図録　千葉県の七夕馬－草で作ったウマとウシⅢ・Ⅳ」　千葉県立房総のむら　二〇〇〇年）で紹介したことがある。

［付記］　本稿は、文部科学省研究費若手研究（B）「『裁縫所』からみる近代の女子教育」（研究代表者　島立理子）の成果の一部である。

（千葉県立中央博物館　教育普及課）